

- 企画名： 「原発に頼らない南アジアを考える」
- 実施日時： 1月14日(土) 13:00~14:30
- 実施場所： パシフィコ横浜会議センター 4F 413
- 登壇者： 福永正明(企画代表者、岐阜女子大学南アジア研究センター 客員教授)
Ms. Suvendrini Kakuchi(司会進行、Inter Press Service、スリランカジャーナリスト)
日下部尚徳(岐阜女子大学南アジア研究センター 特別研究員)
<南アジアゲスト>
インド：Mr. Praful Bidwai
バングラデシュ：Mr. Tanvir Mokammel
- 参加人数： 約50名
- 文責： 福永正明(企画代表者、岐阜女子大学南アジア研究センター 客員教授)

<企画の進行経過>

- 1) 主催者からの依頼による企画開催前の2分間イベント
司会より登壇者紹介：Ms. Suvendrini Kakuchi
- 2) 「南アジアにおける原発の問題」 福永正明
- 3) 「バングラデシュの原発輸入計画について」 日下部尚徳
- 4) コメント Mr. Praful Bidwai・Mr. Tanvir Mokammel
- 5) フロアーからの質問・南アジアからのゲストによる応答
- 6) 主催者からの依頼による企画開催後の2分間イベント、企画代表者による終了の挨拶

<企画の内容>

福永より、南アジアにおける原子力発電所の設置・建設状況、日印原子力協力協定の進展について報告した。特にインドが、核拡散防止条約(NPT)に非加盟ながら1974年と1998年に核実験を強行し、国際制裁を受けていたが、経済改革後の21世紀に入り、アメリカ主導により原子力貿易が可能となったことを述べた。そして、アメリカ、フランス、ロシアがインドでの原発建設計画を進めており、そのなかで日本企業の原子炉格納庫に関する優れた技術が必要なため、日印原子力協定が画策されていることを明らかにした。こうした状況のなか、3月11日の東電福島第一原発事故以後、インド各地で原発反対運動が燃え上がり、ジャイタルプール、クーダングラムなどでの住民の強力な運動について紹介した。

日下部より、バングラデシュがロシアと原発計画を締結したこと、その計画の内容と必要とされる理由、国民の反応とメディアの動きについて報告が行われた。特に、電力インフラが弱体であり、

それに不満を感じる国民には、たとえ原発であれ「とにかく電気が欲しい」との意識が強く、政党においても共産党のみが反対し、メディアではなかなか反対論が登場していない現実が論じられた。そして、開発途上の国と国民が、電力が欲しいから原発が欲しいとの意見に対して、原発で失敗した日本からどのように反対論を伝えられるのだろうかとの提議が行われた。

インドを代表する社会問題コラムニストでありジャーナリストの Mr. Praful Bidwai から、インドの原発反対運動の現状について詳細なコメントがあり、原発は核開発と結びつくものであるとの視点が強調された。また、日印原子力協定に関して、「どして日本の人びとは、インドに原発を売ろうとするのか」との厳しい質問が寄せられた。

バングラデシュを代表するドキュメンタリー映画監督の Mr. Tanvir Mokammel より、前日までの福島被災地訪問の印象から、人間と自然、傲慢になってしまった人間の考え方、その代表例としての原発、さらに 311 以後の日本への強い支援の感情が語られた。

<目的の達成>

南アジア地域に関する原発の問題について、このような世界会議で一つのセッションとして日本国内で開催されたことは、初めてのことである。現地の 2 名の参加があり、日本側からの 2 名の発表に加えて、さらに現状解説、問題点の指摘、さらには日本の人びとへのメッセージなどが行われた。これらは、本セッションを企画した当初の目的を達成するものであり、企画者は本企画を高く評価されたと考える。

<今後の行動、新しいつながり>

セッション終了後、南アジアからのゲスト 2 名と討議を続け、今後も共に活動を行うことを決めた。さらに、この企画の内容について、ネット中継が行われることを前提としつつも、英文にて報告を刊行し、可能であれば南アジアにおいて次なるセッションを開催することを決した。

<まとめ>

本企画は、南アジア地域を扱う唯一のセッションであったが、会議参加者に対して、南アジアにも原発の問題が存在し、それが日本社会と密接に結びついていることを示せたことはきわめて有意義な成果であったと考える。

今回のセッションの成果を糧として、さらなる国際協力と理解を深めていく決意である。

